

□城郭としての鳥海柵

城郭という側面から鳥海柵の位置づけを考えてみたい。

城郭は政治と軍事の中心。政治と軍事の中心があるとするならば、そこに経済と文化が集まる。したがって、地域の中心は城郭だと考えなければならぬ。鳥海柵は胆沢城に

町民の愛着 遺跡生かす鍵

代わってできた政治・経済・文化の中心だったという視点で、見直していく必要がある。

城の変遷をみると、胆沢城は802年に坂上田村麻呂が造った二辺670呎という平らで真四角



鳥海柵跡遠景（町教育委員会提供）。鳥海柵の西（写真手前側）に街道があったのか。調査研究を進め、解明すべき点が多い

な城。これは真ん中に政治を行う場所を置き、左右対称に造った城である。昔の寺も平城京、平安京も同じように造られた。国を統一するためのシンボルマーク。これが胆沢城の特徴である。

一方鳥海柵は、そのような形をしていない。北上川に向かって南北に四つ自然地形が並んでいるだけ。

当時の街道はどうだったかという点、胆沢城から紫波城、徳丹城まで北へと続く道があったはずである。それを平泉・藤原氏が奥大道として陸奥・外ヶ浜までつなげた。胆沢城の時代、その街道がどこにあったのか。私は鳥海柵の西側にあつたと考えている。ということは西側が表であり、それに合わせてプラン（柵の構

造や配置ができていた。横手市の大鳥井山は、やはり段丘を使っている。だが、鳥海柵とは異なる。段丘の角に二つ大きな郭を配し軍事的要素が強い。どちらからも敵

に攻められないような構造になっている。それに比べ鳥海柵は、壕の造りに工夫は乏しく、軍事面で劣っている。なぜ、そのような形になったのかはこれから調べていかなければならない。

□封建時代の城の原点

平泉は、柳之御所が中心と思われているが、そうではない。隣には加羅御所という立派な屋敷跡があり、無量光院、毛越寺、中尊寺などとはばらばらに配置されている。このように平泉一帯は一つの城になっていない。たとえば、時代の新しい金ヶ崎城（金ヶ崎要害）を例に考えてみると、真ん中に殿様がいる本丸があつて、二番目の重臣が二の丸に、三番目が三の丸、一番の下級が外にいる。要するにピラミッド型が封建時代の城である。

その段階に至っていない城が、鳥海柵や大鳥井山の柵で、平泉も同じ。

その点で、封建時代の城の原点として行き着く先が鳥海柵である。

□遺跡の活用、発信へ

最後に、遺跡を今後活用していくためには信頼されるデータが必要で、学術的な調査研究を一層進めていくことが求められる。そして、何といっても、受け皿は町民。町民がさまざまな勉強会を開き、祭りを開催するなど遺跡への愛着を深め、外に発信していくことが大切だ。

津軽の安東氏や九州長崎の松浦氏は、安倍貞任と宗任の後胤（子孫）とも伝えられている。それがなぜか水軍の親玉になった。それらにも注目して、安倍シンポジウムを開催するのでもいいのではないだろうか。

◇ ◇ ◇

昨年度末に金ヶ崎町で開催されたシンポジウムに登壇した専門家の講演要旨をまとめ、4月から12回にわたり連載してきた「鳥海柵を知る」は今回で終了します。報道部長池田藍が担当しました。

金ヶ崎の国指定史跡 鳥海柵を知る

— 町民大学 2013 シンポジウムより —

12

本堂 寿一氏（前北上市博物館長）

総括・鳥海柵跡について ①